

2019-3/17 難經の脈、構造と解説-4 加藤秀郎

十八難曰、

脉有三部、部有四經、手有太陰陽明、足有太陽少陰、爲上下部、何謂也、

脉に三部が有り部に四經が有り、手に太陰と陽明が有り足に太陽と少陰が有る。上下の部と爲す。とは何を謂うか、

橈骨動脈拍動部には三寸の長さがある。指三本を添えた指の場所をそのまま三部に置き換えられる。その三部のそれぞれに四經あるという。3×4＝12だからである。

さらに手に太陰と陽明が足に太陽と少陰が有るという。そしてそれが上下を為すというのはどういう事かという問いかけである。

然、手太陰陽明金也、足少陰太陽水也、

然り、手の太陰と陽明は金也。足の少陰と太陽は水也。

三陰三陽論と五行論の連結の確認である。この時代にはすでに当然のことをあえて確認している。実は手の太陰と陽明は金ですよと言う確認ではなく、現在(難經の時代)医学での五行では金と配当されているものの内容的性質は手(天)の太陰と陽明ですよ、という黄帝内径以前の医学との符合の確認だと思える。水は足(地)の少陰と太陽。

金生水、水流下行、而不能上、故在下部也、

金は水を生み、水は下に流れて行き、而(そう)して上るは不能す。故に下部に在る也。

足厥陰少陽木也、生手太陽少陰火、火炎上行、而不能下、故爲上部、

足の厥陰と少陽は木也。手の太陽と少陰の火を生む。火炎は上行し而(そう)して下るは不能す。故に上部と爲す。

手心主少陽火、生足太陰陽明土、土主中宮、故在中部也、

手の心主と少陽は火で、足の太陰と陽明の土を生ず。土は中宮を主る。故に中部に在る也。

此皆五行子母、更相生養者也、

此れ皆、五行の子母、更に相生の養者也。

脉有三部九候、各何所主之、

脉に三部九候が有るは各所の主は何か。

然、三部者、寸關尺也、九候者、浮中沈也、

然り、三部は寸と關と尺也。九候は浮中沈也。

上部法天、主胸以上至頭之有疾也、

上部は天に法し胸以上で頭に至るの疾の有るを主る也。

中部法人、主膈以下至齊之有疾也、

中部は人に法し膈以下で齊に至るの疾の有るを主る也。

下部法地、主齊以下至足之有疾也、

下部は地に法し齊以下で足に至るの疾有るを主る也。

審而刺之者也、

審(細かく見きわめる)し而(そう)して刺する者也。

人病有沈滯久積聚、可切脉而知之耶、

人の病に沈滯(たい)して久しく積(しゃく)聚(しゅう＝集)が有る。切脉にて知るは可か。

然、診在右脇有積氣、得肺脉結、脉結甚則積甚、結微則氣微、

然り、診して右脇に在りて積氣を有すは、肺を得て脉は結。脉の結が甚(はなは)だしいければ則ち積も甚(はなは)だしい。結が微すれば則ち氣も微。

診不得肺脉、而右脇有積氣者、何也、

診して肺の脉を得ずれば右脇に積氣を有するは何也。

然、肺脉雖不見、右手脉當沈伏、

然り、肺脉の雖(これ)を見えずれば、右手の脉は沈伏に當(＝当;あた)る。

現代の六部定位の左右の配当らしきものが見られるのはこの箇所だけである。

其外痼疾同法耶、將異也、

其の外(ほか)に痼疾(こしつ;いつまでも治らない病)も法は同じか。將(それとも)異か。

然、結者、脉來去時一止無常數、名曰結也、

然り、結は脉の來去で時一止みて常數が無きを名が曰く結也。

伏者、脉行筋下也、

伏は脉が筋下を行く也。

浮者、脉在肉上行也、

浮は脉が肉上に在って行く也。

左右表裏、法皆如此、

左右表裏、法は皆が此れの如く。

假令脉結伏者、内無積聚、脉浮結者、外無痼疾、有積聚、脉不結伏、有痼疾、脉不浮結、爲脉不應病、病不應脉、是爲死病也

假に令すれば脉の結伏は内に積(しゃく)聚(しゅう＝集)が無き。脉の浮結は外に痼疾(こしつ;いつまでも治らない病)が無き。積聚の有るは脉が結伏でないものは痼疾(こしつ;いつまでも治らない病)が有る。脉が浮結でないものは脉に爲(お)いて病に應ぜず。病に應ぜぬ脉は是に爲(お)いて死病也。

黄帝問曰
余聞九鍼於夫子 衆多博大 不可勝數
余願聞要道 以屬子孫 傳之後世 著之骨髓 藏之肝肺 歆血而受 不敢妄泄 令合天道 必有終始 上應天光星辰歷紀 下副四時五行
貴賤更互 冬陰夏陽 以人應之奈何 願聞其方
岐伯對曰 妙乎哉問也 此天地之至數
帝曰 願聞天地之至數 合於人形血氣 通決死生 爲之奈何
岐伯曰 天地之至數 始於一 終於九焉 一者天 二者地 三者人 因而三之 三三者九 以應九野
故人有三部 部有三候 以決死生 以處百病 以調虛實而除邪疾
帝曰 何謂三部
岐伯曰
有下部 有中部 有上部 部各有三候 三候者 有天有地有人也 必指而導之 乃以爲眞
上部天 兩額之動脉 上部地 兩頰之動脉 上部人 耳前之動脉
中部天 手太陰也 中部地 手陽明也 中部人 手少陰也
下部天 足厥陰也 下部地 足少陰也 下部人 足太陰也
故下部之天以候肝 地以候腎 人以候脾胃之氣
帝曰 中部之候奈何
岐伯曰 亦有天 亦有地 亦有人 天以候肺 地以候胸中之氣 人以候心
帝曰 上部以何候之
岐伯曰
亦有天 亦有地 亦有人 天以候頭角之氣 地以候口齒之氣 人以候耳目之氣
三部者 各有天 各有地 各有人 三而成天 三而成地 三而成人 三而三之 合則爲九 九分爲九野 九野爲九藏
故神藏五 形藏四 合爲九藏 五藏已敗 其色必夭 夭必死矣
帝曰 以候奈何
岐伯曰
必先度其形之肥瘦 以調其氣之虛實 實則寫之 虛則補之
必先去其血脉 而後調之 無問其病 以平爲期
帝曰 決死生奈何
岐伯曰
形盛脉細 少氣不足以息者危
形瘦脉大 胸中多氣者死 形氣相得者生 參伍不調者病
三部九候 皆相失者死
上下左右之脉 相應如參春者 病甚 上下左右相失 不可數者死
中部之候 雖獨調 與衆藏相失者死 中部之候 相減者死 目内陷者死
帝曰 何以知病之所在
岐伯曰
察九候 獨小者病 獨大者病 獨疾者病 獨遲者病 獨熱者病 獨寒者病 獨陷下者病
以左手足上 上去踝五寸按之 庶右手足當踝而彈之 其應過五寸以上 蠕蠕然者不病
其應疾 中手渾渾然者病 中手徐徐然者病
其應上不能至五寸 彈之不應者死 是以脫肉身不去者死
中部乍疏乍數者死
其脉代而鉤者 病在絡脉
九候之相應也 上下若一 不得相失
一候後則病 二候後則病甚 三候後則病危 所謂後者 應不俱也
察其府藏 以知死生之期
必先知經脉 然後知病脉 眞藏脉見者 勝死
足太陽氣絕者 其足不可屈伸 死必戴眼
帝曰 冬陰夏陽奈何
岐伯曰 九候之脉 皆沈細懸絕者 爲陰主冬 故以夜半死
盛躁喘數者 爲陽主夏 故以日中死
是故寒熱病者 以平旦死
熱中及熱病者 以日中死
病風者 以日夕死
病水者 以夜半死
其脉乍疏乍數 乍遲乍疾者 日乘四季死
形肉已脫 九候雖調 猶死
七診雖見 九候皆從者 不死 所言不死者 風氣之病 及經月之病 似七診之病而非也 故言不死
若有七診之病 其脉候亦敗者死矣
必發噦噫 必審問其所始病 與今之所方病 而後各切循其脉 視其經絡浮沈 以上下逆從循之
其脉疾者不病 其脉遲者病 脉不往來者死 皮膚著者死
帝曰 其可治者奈何
岐伯曰
經病者 治其經
孫絡病者 治其孫絡血
血病身有痛者 治其經絡
其病者在奇邪 奇邪之脉 則繆刺之
留瘦不移 節而刺之
上實下虛 切而從之 索其結絡脉 刺出其血 以見通之
瞳子高者 太陽不足 戴眼者 太陽已絕 此決死生之要 不可不察也
手指及手外踝上五指留鍼

其の治すべき者を奈何せん？

経の病なるは、其の経を治す。孫絡の病なる者は、其の孫絡の血を治す。血病にして身に痛みある者は、其の経絡を治す。

其の病なるは、奇邪に在れば、奇邪の脈は、則ち之を繆刺す。留瘦移らざれば、節してこれを刺す。

上実し、下虚するは、切してこれに従う。

其の結絡の脈を索めて（もとめて）、刺して其の血を出だし、以てこれを見わし通す。

瞳子高き者は、太陽不足す。戴眼なる者は、太陽已に絶す。

此れ死生を決するの要、察せざるべからざるなり。

手の指及び手の外踝の上五指に鍼を留む。

三部と九候の部位

上部の天は、両額の動脈なり。頭角の氣

上部の地は、両頬の動脈なり。口齒の氣

上部の人は、耳前の動脈なり。耳目の氣

中部の天は、手の太陰なり。肺

中部の地は、手の陽明なり。胸中の氣

中部の人は、手の少陰なり。心

下部の天は、足の厥陰なり。肝

下部の地は、足の少陰なり。腎

下部の人は、足の太陰なり。脾胃の氣

三部九候、皆相い失する者は死す。

上下左右の脈、相い応ずること参じ春が如き者は、病甚だし。

上下左右相い失して数うべからざる者は死す。

中部の候、独り調うも、衆蔵と相い失するは死す。

中部の候、相減は死す、目の内陷る者は死す。

九候を察するに

独り小なる者は病む。独り大なる者は病む。独り疾き者は病む。

独り遅き者は病む。独り熱き者は病む。独り寒き者は病む。

独り陷下する者は病む。

左手を以て足の上、上 踝を去ること五寸にしてこれを按じ、

右手足を庶て(もって)踝に当ててこれを弾く。其の応五寸以上を

過ぎて、蠕蠕(じゅじゅ)然たる者は、病まず。其の応疾く、手に

中りて渾渾然たる者は病む。手に中りて徐徐然たる者は病む。

其の応上五寸に至ること能わず、これを弾きて応ぜざる者は死す。

天地人の再考

‘天’‘地’‘人’は、世の森羅万象を3つに分けたもので、これを‘三才’と言います。

‘天’とは、自然が持つ定石的变化で、あらゆることの基準。

‘地’とは、天という基準から作用を受けて、自然界の状況や環境を起こす働き。

‘人’とは、天から作用を受けて反応した地の様相と、逆の反応をして人体はホメオスタシスを起こしている。

これらは単独で考えるものではなく、2つ組み合わせて

天と地 「天が作用し、地が反応をした」という様相。

天からの作用を「陽気」といい、この陽気を受けて地が様々な反応をするという、内在された性質を「陰気」といいます。日が昇って明るくなり沈んで暗くなる。長く強く当たれば地表の温度は上昇し、植物は芽吹き繁茂する。この「陽気に対して地の陰気が反応する」は、陽気的作用量が増えれば地の反応は亢進し、減れば衰退します。この亢進を「陽」、衰退を「陰」として、我々がとらえる最も大きな陰陽の一つ「時間」となります。夏は陽、冬は陰、昼は陽、夜は陰がそれで、時間の変化で様相が把握できます。

天の作用は下へ、地はその上から受けた作用に従って反応する。この関係性を「上下論」といい、もう一つの大きな陰陽の「空間」となります。

大きさや移動距離など空間の変化で状況の把握ができます。

地と人 「地が反応し、人が逆の対応をした」という人体の生理

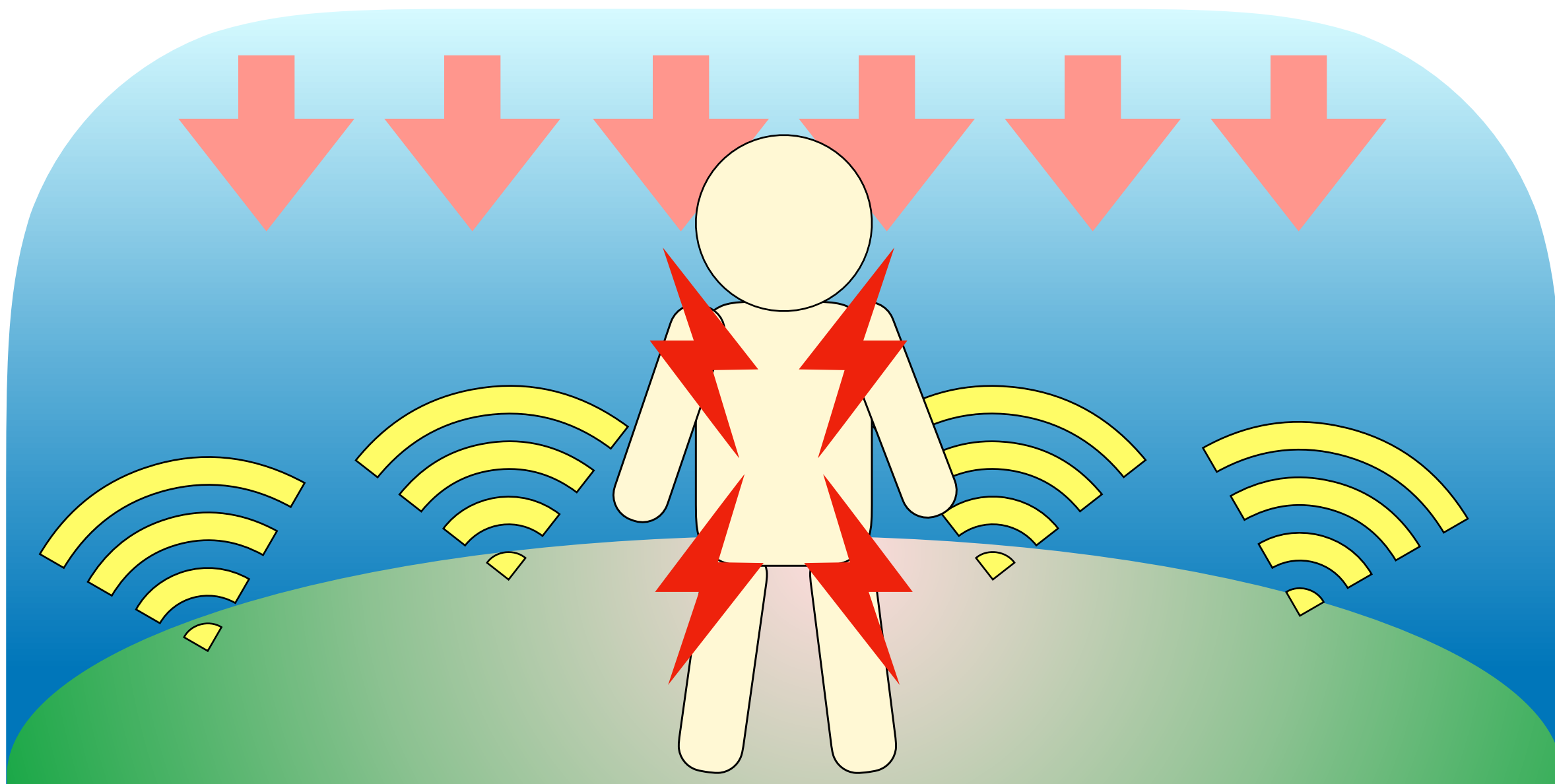
「天の作用が大きいと地の機能が亢進し、小さいと衰退する」という地の性質に対して「暖まると機能が衰退し、冷ますと亢進する」という人の性質の比較です。人が一年を通じて昼夜を問わず活動できることの原理です。外の環境がどうであろうと体内は一定であるという状態の把握です。それは生理のうちの「代謝」を示します。地の反応変化に対して代謝量を変えて逆の対応をする。この対比を分析する方法を「左右論」といいます。右を基準にして左を、左を基準にして右をとという比較が可能です。

天と人 人体が「地の反応と逆の対応ができる原理」

人が必ず持つ成長や老化や寿命。生きて行くという活動をする人体の性質と、体外環境と人体の中核の相互連絡の関係性です。

体内の五臓を臓器というカテゴリーから広げて、五行の相生相剋というエネルギーグループに当てはめ、生きるという活動様相や成長や老化や寿命といった生理状況の把握をして、人体内部の働きを対外的に言語対応できるようにする捉え方です。

内と外の交流による考え方、上下、左右に対して「前後論」と言います。人の意志や感情は前方へ向かい、情報は内へ(後方へ)と向かうと考えます。



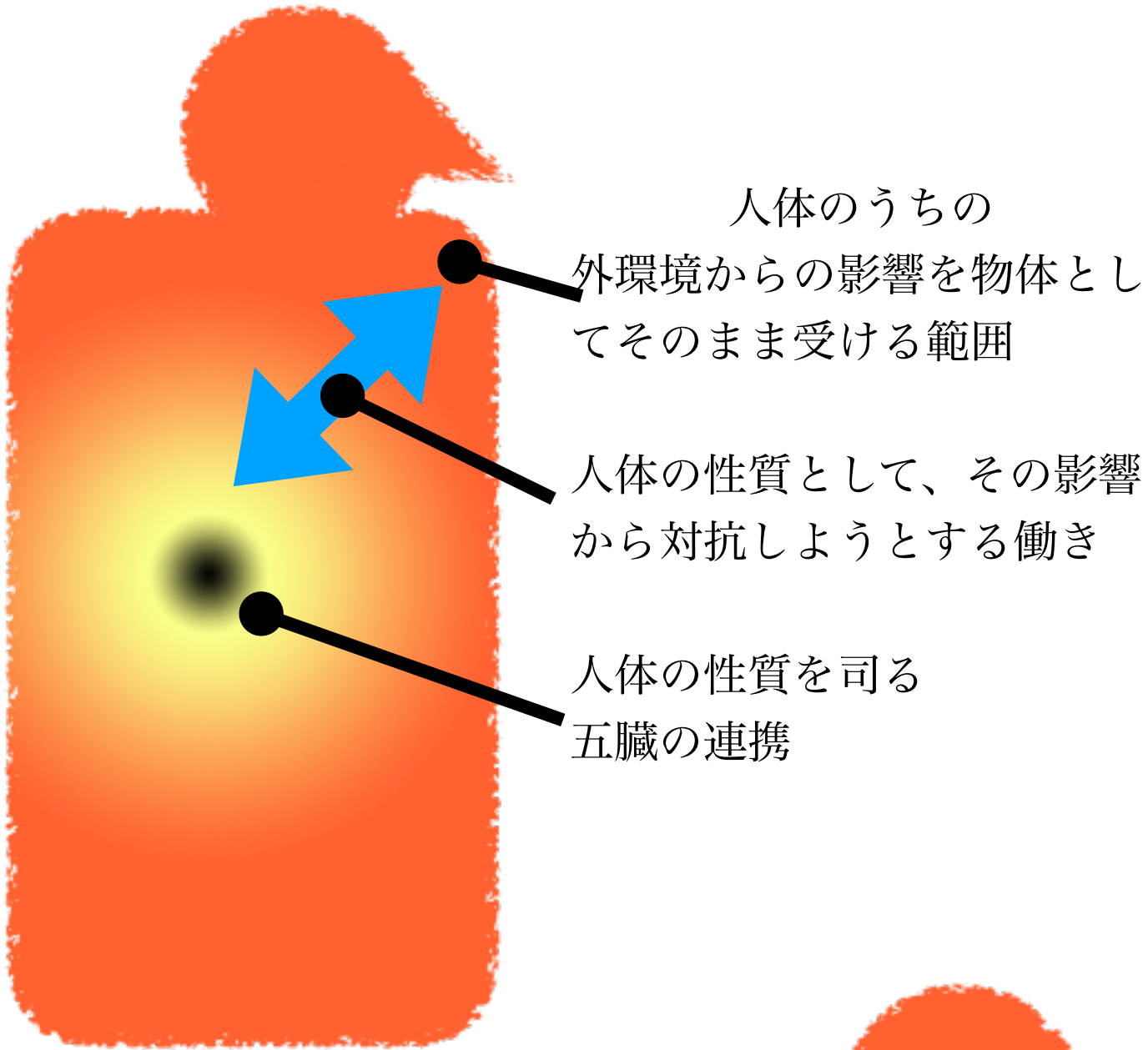
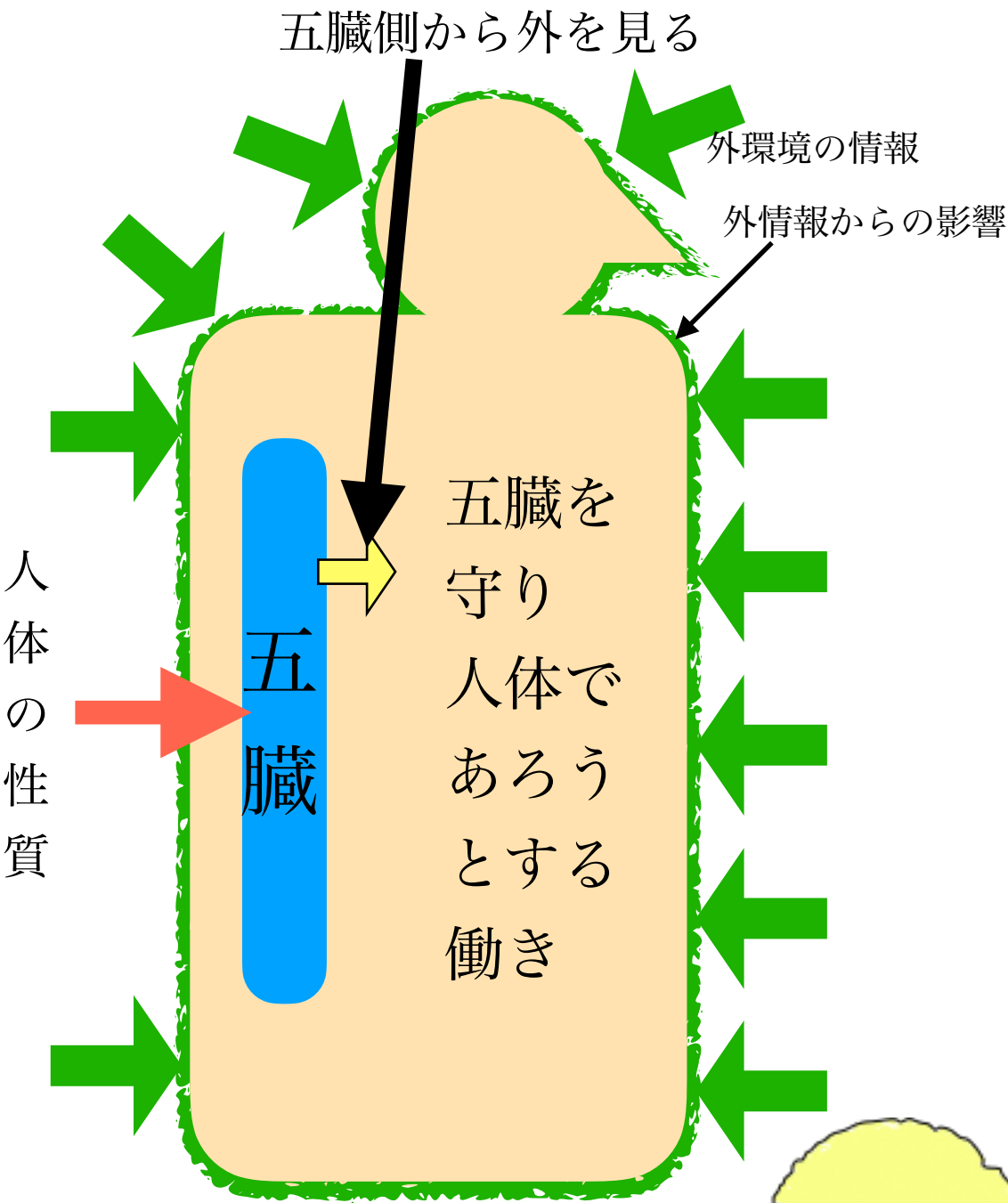
実はこの天地人という考え方は「自然界の中での人体」を、観る方法でした。つまり人体が大自然にあって外から五臓というものを想定して、体内生理がどのように動いているかを捉えていました。

ところがこの考え方をそっくり人体に入れてしまったのが、素問の三部九候と思われます。

天・地・人という言葉で人体を測ろうとした記載は他になく、かなり特別な観点であるといえ、難経を遺した人はこの三部九候にある特別な観点の意味を読み取って、黄帝内経を集約する書物を作る動機の一つにしたであろうと考えています。天地人を体に入れるとはどういうことかと言うと、組み合わせのうちの「天人」の細分化、外から五臓を考えるのではなく、五臓側から外を見ると言うものです。

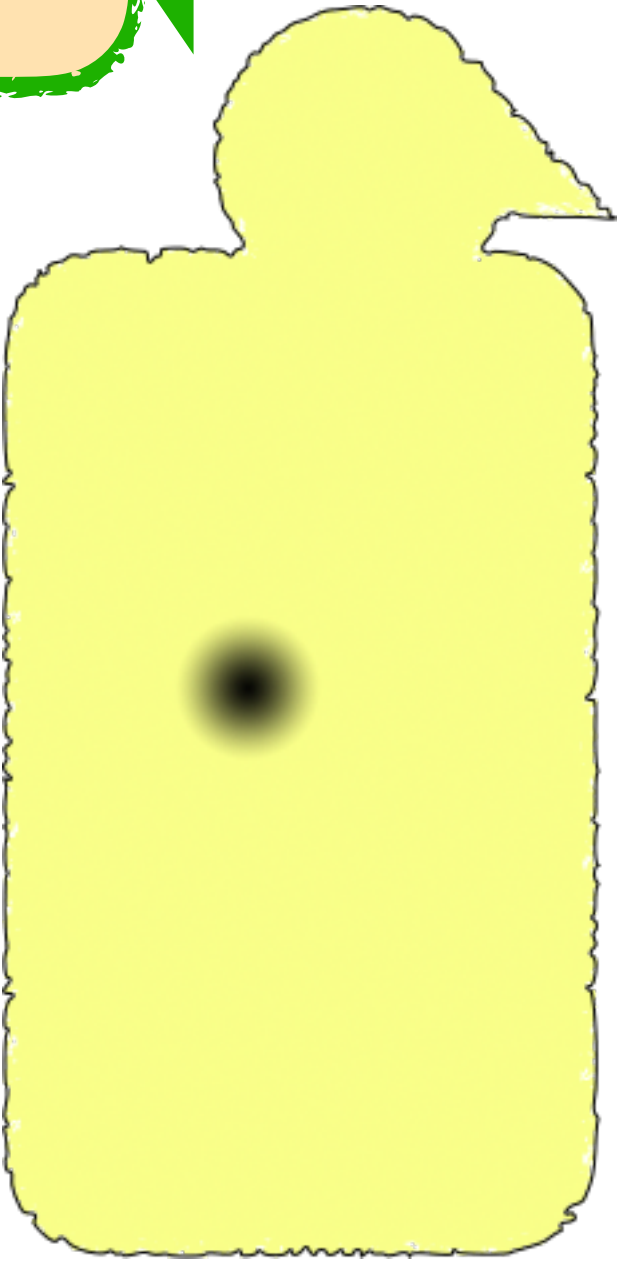


外から五臓を考える



生理動作する生体

外環境の影響から肉体の状態の安定を保つ働き。命の動きそのものとも言え、この動きを五臓に置き換えて論理性を高めて体内状況を把握しやすくした。

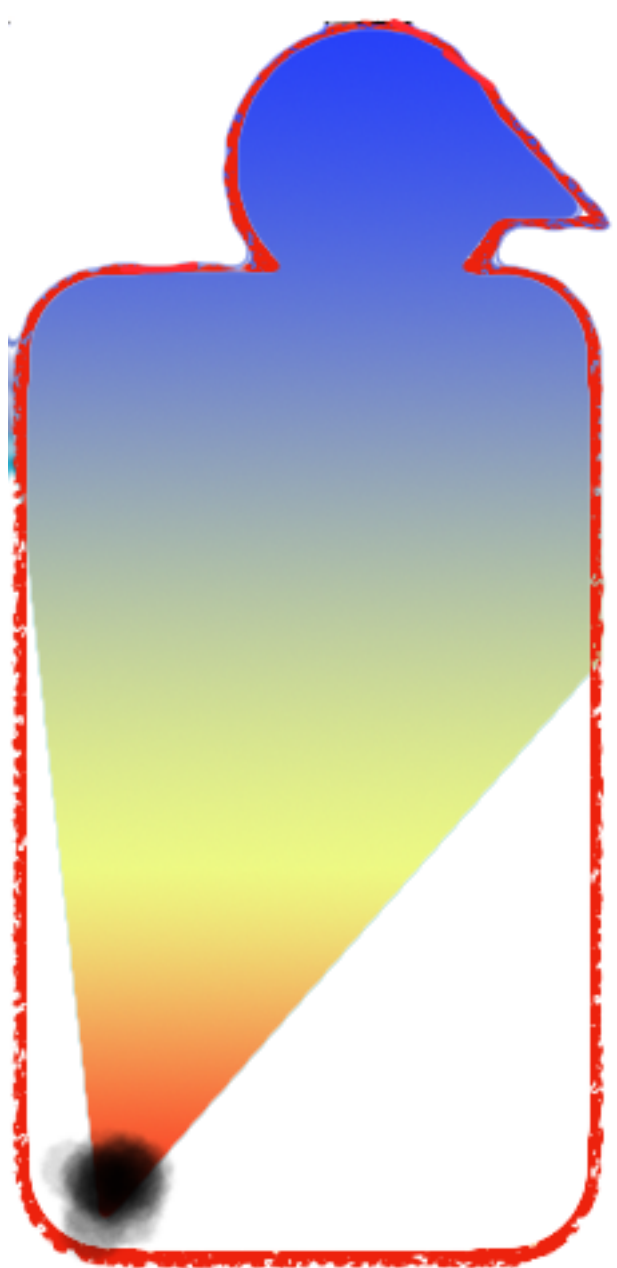


物質である肉体

気温が高ければ次第に芯まで外気と同じ温度になり、外気温が下がればまた、その温度のままに冷やされる。つまり命を失った死体の状態。死体であれば腐敗も起こり、形態も壊れていく。



そのためには人体を物質である肉体と、生理動作する生体とに分ける。



体内に入れた天地人とは、

- 天；人体のうちの、外的影響を物体として受けている状況
- 人；人体が物体として影響を受けたことに対して、生体がどのように働いているか
- 地；人体の状態の、安定を保つために命がどうに動いているか

難經の十八難に	上部	天	胸以上で頭に至るの疾	上焦
	中部	人	膈以下で齊に至るの疾	中焦
	下部	地	齊以下で足に至るの疾	下焦

とありました。

天人地を上中下に分け、天を頭頂から胸郭までの病とし、記載はないが上焦と同位。人を胸郭から臍までの病とし、中焦と同位。地を臍から足までの病とし下焦と同位。単に上下だけではなく、内外とも同じと考え、前ページの「五臓側から外を見る」の図の、緑の部分が天、肌色が人、青の五臓が地。

◀この上中下と内外を合わせて図式化したものが左図です。

ただあくまでも記載は“疾”とあり、疾とは急性疾患や医療側が多角的に認識しやすい病状を意味します。つまり症状が胸郭より上部にあり、肉体が物質的な意味合いで外環境からの作用に対して、状態破損を起こした疾病様相を「天」という言葉で限定しています。

また症状が胸郭から臍までで、生理動作が状況対応し切れていない様相が「人」、臍から足までの症状で、人体が持つ性質そのものがすでに状況対応できないものが「地」です。

この記載は生理か病理かというより、外環境に対しての人体内の様相のピックアップであり、難經以前のそれまでの医学であった外からの観察から、五臓を命の動きと想定してその五臓視点から、体外と対峙する医学を発想したその視点移動を十八難では説明をしているのです。

素問の三分九候では上部を頭とし、額を天、耳前を人、頬を地とし、それぞれの脈動で観察しました。脈から読み取る対象は頭角、耳目、口歯です。天を精神、人を情報収集、地を飲食の状態としたのです。

中部は腕として、天を太陰(太淵)で肺、人を少陰(神門)で心、地を陽明(合谷)で胸中の気。

下部は足として、天を厥陰(太衝)で肝、人を太陰(太白-公孫)で脾胃の気、地を少陰(太谿-大鐘)で腎。

おそらく素問編纂当時も、天地人を人の体に当てはめたこと、診察ポイントの多さや唐突に五臓と連結されていることなどから三部九候の意味を理解する人は少なく、この一編に記載されているに過ぎません。

しかしこの記載を読んだ難經の著者は、頭と体に分け、頭には五臓を記さなかったことや、体を腕と脚に分け経絡に従って配当された中部と下部の五臓に三焦との共通性を見出したことに、黄帝内經までとは違った観点を見つけました。体を五臓とそうでない箇所に分けるという考え方です。

この場合、上部は頭ですが、それは心の働き、飲食の摂取、情報の獲得といった内外の交流を見立てたものです。それと五臓に駆動される体を分けたのです。上部が示していた頭部を体表と置き換え、外と交流する器官とし、さらには物体として外環境の影響をそのまま受け入れる箇所と考え、上部全体を天としました。

ここから十八難の三部九候がスタートします。上部を横隔膜まで範囲を広げ、上昇の要素を取り入れ心と肺を配当し、外気を直接吸入して外からの干渉を物質的に直接受けると考えます。

呼吸は随意不随意関係なく行えますが、時に吸気は自覚的にも行えることから本来の働きと自覚性から地と人の臓を配当し、呼気は吸入して膨らんだ体が縮む力で勝手に吐き出せることから、物質的な範囲と考えました。

十八難の三部と四経

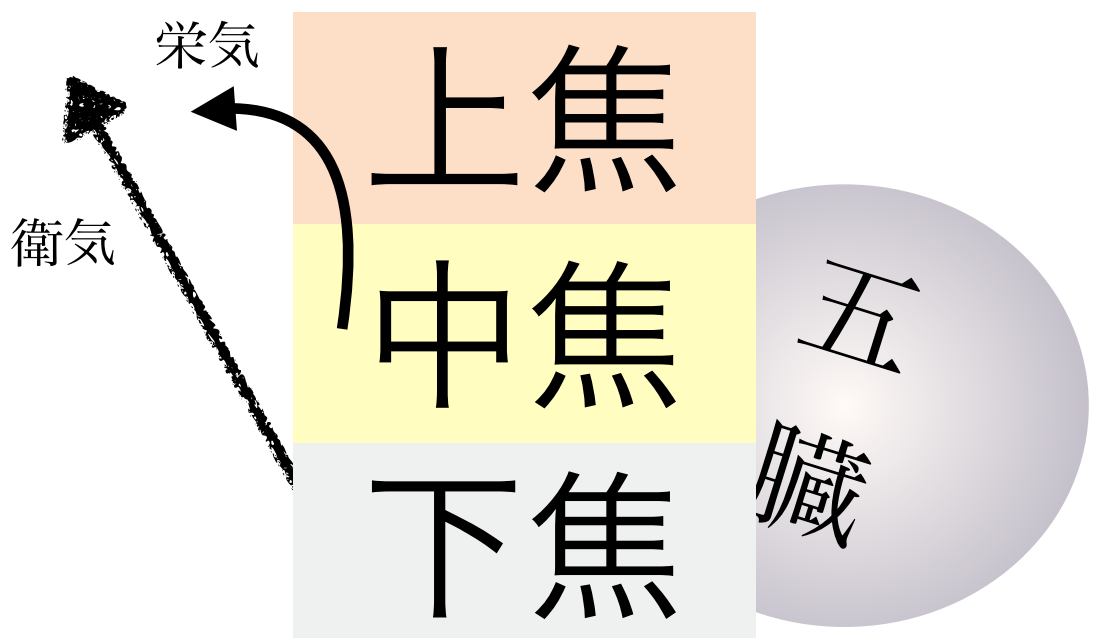
	下	中	上
上焦	心肺	火(手の心主と少陽)	
中焦	脾	金(手の太陰と陽明)	土(足の太陰と陽明)
下焦	肝腎	水(足の少陰と太陽)	

三部と九候の部位

上部の天は、両額の動脈なり、頭角の気
上部の地は、両頬の動脈なり、口歯の気
上部の人は、耳前の動脈なり、耳目の気
中部の天は、手の太陰なり、肺
中部の地は、手の陽明なり、胸中の気
中部の人は、手の少陰なり、心
下部の天は、足の厥陰なり、肝
下部の地は、足の少陰なり、腎
下部の人は、足の太陰なり、脾胃の気

吸気は随意、呼気は萎む力で自然にという物質と生理という関係性に呼吸数と脈の拍数なども取り入れて
難経での「五臓から見た生理学」が発展し、その記載は随所にあります。

五臓から外を見たとき、まず最初にあるものが三焦です。



体の物質的な範囲である、温めればただ温められ冷やせば
ただ冷やされる状態。その状況や様子の収集と対応の働き
を「衛気」という想定モデルにしました。
靈枢の営衛生会篇で下焦から出るとしたことが、三焦が単
なる三層分類ではないという認識であったことが判ります。
人に熱が有り、汗を則ち出す。これらが衛気の不循で
あり、物質の範囲に対して生体がただ温められたことに対
して冷やしたり、ただ冷まされることに温めたりを、衛気
が循環しないことで適切にできなくなったということです。

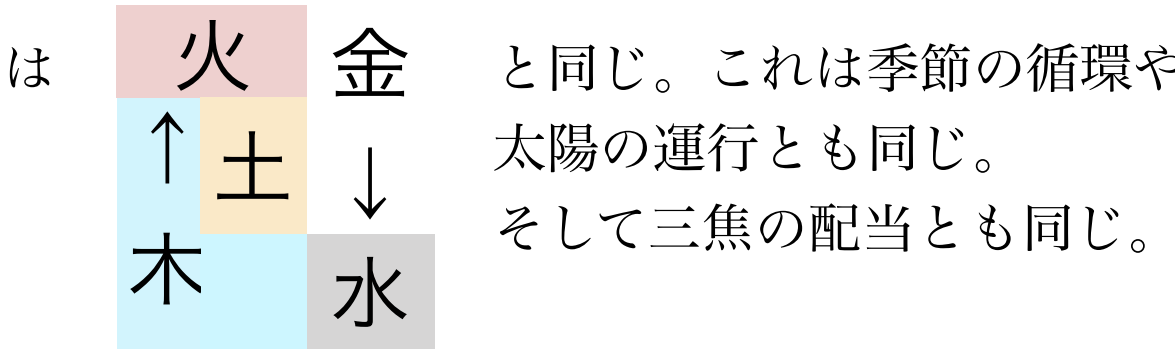
靈枢にもしかしたら素問からの引き継ぎで、物質と生体を分ける認識が伝わっていたのかもしれませんが、
冷えたり温まり過ぎれば温めたり冷ましたりする生理が人体の性質としてなければ、衛気が下焦から出る
とはならなかったと思います。
衛気は働きでありながら濁とあり、対して榮気は清とありながら血を為すとあり、人体が持つ複雑な要素
にどうにか対応しようとしたことが伺えます。

その複雑さを難経は、肉体を物質と生体とに分離したことで整理したであろうと考えています。
物質である器の肉体の天と、その中に収まる五臓の地。その五臓の働きを器と相互交流させる内容物の人。

その五臓の相互交流の

天へと登る作用のうちの、下から中を木である足の厥陰と少陽、上を火の手の心主と少陽。
内容物の流通内容とした中の下が木の足の厥陰と少陽、中が土の足の太陰と陽明、上が火の手の心主と少陽。
地へと下がる作用の、上と中が金の手の太陰と陽明、下が水の足の少陰と太陽。

	下(る)	中	上(る)
上	金(手の太陰と陽明)	火(手の心主と少陽)	
中		土(足の太陰と陽明)	木(足の厥陰と少陽)
下	水(足の少陰と太陽)		



本来はただの物体であるはずの肉体に、熱をかけ水で冷ます人の部分の動作。体外環境や肉体の運動量に
合わせて飲食の摂取を変え、季節に合わせて肉体の含水量を変えて外環境に適応する三焦の働き。
三焦は五臓の有能な出先器官であり、難経にあっては生理の中核になりました。
黄帝内経までは五臓が生理の中核でした。しかし単なる想定論にしかならない五行論では具体把握にかけ、
そこで体内水分の変化や熱のかかり具合が触診などでわかる三焦を、生理の中核を置く必要がありました。
最初にそれを目指したのが、素問の三部九候論の著者ではないかと思われれます。五行論一辺倒の当時の人
たちに、三焦の有用性を解くために考え出された論説でしたが、その時は試みで終わっています。
素問の三部九候論の形を整理し試みる方法を変えて、難経を成立させる考え方の一つになりました。
この三焦が壊れるかどうか、五臓の在り方に影響をします。三焦はホメオスタシスそのものといえ、そ
の体内環境の維持で守っているものが五臓という命です。五臓は三焦というホメオスタシスを作って自ら
を守っているのですが、三焦という働きが成立しなくなったとき、五臓の五行という連結に支障が起きて
います。その支障が起こる状態と理由の把握に、物質と生体の区分けが必要でした。そうすることで難経
の著者は、五臓を直接治す方法を伝えようとしたのです。
その発端の一つが素問の三部九候論とその発展の十八難なのです。